

生涯学習

No.578

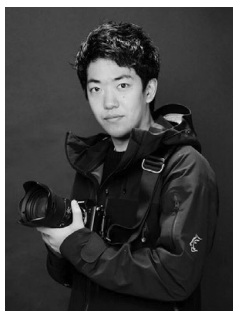
かおり高い 文化のまち

発行 下諏訪町
教育委員会
編集 生涯学習
編集委員会

〒393-8501
長野県諏訪郡下諏訪町4611-40
(下諏訪総合文化センター内)
☎ 0266-27-1111(内線718)
FAX 0266-28-0131
メール syougai@town.
shimosuwa.lg.jp

北極の地 バフィン島

時を経て感じる探検家の足跡



写真家

花岡 凌 (東赤砂)

たそうなソリを引いている写真が載っている。

最初に見た時、頭のおかしな人がいるのだと思ったことをよく覚えている。

しかし、その後、荻田氏の冒険を追っていくうちに心惹かれていくことに気がついてしまった。

ちょうど荻田氏が若者を連れて北極を冒険するという企画があることを知り、僕は荻田氏にメールを送った。特に募集をしていたわけではなかったが、同じ様に連絡をとってきた若者たちが集まっていた。

会社員を辞めて、北極圏に位置

―はじめての冒険―

するバフィン島に立っていた。この冒険を経て僕は写真家になった。



呼ばれる先住民である。本州の2倍もある大きな島で、数百キロおきに小さな村が点在するのみ。この島では遙か昔から狩猟をする事で生きてきた。

参加した若者は12人、皆、アウトドア経験のない素人であった。

1日を通してマイナス20度、30度の世界は、新鮮で刺激的であると同時にジリジリと僕たちの命を削っている感覚があった。

そんな過酷な環境下で、一ヶ月分の食糧や装備をそりに積んで600キロの距離を引いて歩いた。冒険の発源地であるパングニタングという村を出発した僕たちは、まず大きくて深い谷の底を200キロ進み、バフィン湾に抜ける。その後はバフィン島に沿って、凍った海の上を400キロ北上してクライドリーバーという村を目指す。この村が冒険のゴールだ。

―はじまり―

いつか、あの日読んだ絵本の主人公の様に冒険がしてみたい。そう思って生きてきた。そして26歳の時、その「いつかは行動しない限り訪れることはない」と気づいた。

そんな時一冊の本に出会う。荻田泰永著の『北極男』(講談社)という本である。

北極冒険家の荻田氏が北極を旅した半生を綴った本で、表紙をめくると荻田氏が、半径数百キロ、誰もいない氷原にて、重

冒険の舞台であるバフィン島は、カナダ北極圏に位置し、人口が約1万人、半数以上がイヌイットと



雪原の海から見た景色

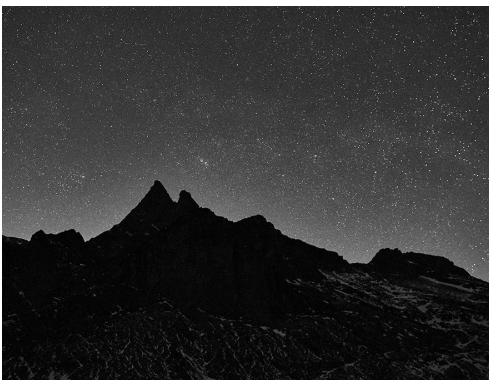
冒険中の一日のスケジュールは至ってシンプルだ。朝7時に起床して雪から水を作る。朝飯を食う。9時から18時まではひたすら歩き、その後、夜飯を食って寝る。(昼飯は行動食のみで済ます。)

この生活で一番時間を食うのが水を作る作業だ。基本的に雪や氷を溶かして水にするのだが、かなりの量を溶かさないと必要な水の量にはならない。2リットルのやかんを水にするだけで1時間以上を要する。食事はジップロックに分けられた乾燥米やインスタント麺である。

―探検家の足跡―

準備段階からルート上にMt.オーディンやMt.トールと呼ばれる山々がある事を聞かされていた。なぜ、カナダの山に北欧神話の神様の名前がついているのか。調べてみると、11世紀頃に北欧の探検家達が西洋人として初めてバフィン島を探検したらしい。自分たちの住む土地にどうしてその名を付けなかったのだろうか。不思議に感じたが、その答えは現地でのある体験を経てようやく理解できた気がする。

2019年4月10日、太陽が沈み、気温はマイナス30度まで下がった。風のない静かな夜だった。

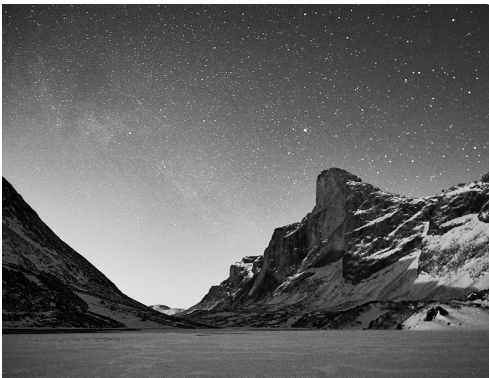


Mt. オーディン

1日の行動が終わり、同じテントの相方と夕食を食るように食べた。その後、マメ予防に足裏のテーピングをしながら相方が言った。「オーロラ出てるかな?」

すぐにカメラを準備して外に出てみる。オーロラは出ていなかった。しかし、月明かりに照らされた景色が目飛び込んできた。綺麗とか美しいとか、単に絶景を褒めるような感覚ではない。そこに漂う空気感に僕ら二人は圧倒されていた。無機質な岩と氷だけの異世界があった。

こんな光景が存在したのか。呆気にとられていると寒さで体がぶるぶると震えていることに気がつ



Mt. トール

いた。

しかし、不思議な高揚感に包まれていた僕は、もう少しこの高揚感に包まれていたいと思った。

今思えば、それは自分がこれまでより「死」に近い所まできたことで「生」を強烈に体感したからであろう。生や死は神話や宗教と繋がりが深い。

この無機質な世界で生と死を強烈に意識することで、この地を旅した探検家達は神の気配を感じたのだろう。

それから千年の時を経て、僕らはそんな探検家達の足跡を感じたのだった。



別の日に見たオーロラ

令和3年度 下諏訪みらい塾 「みんなで考えるまちづくり」報告1

公民館では、住民主体で地域や生活の課題を自由に考え合う場をつくりたいと考え、7月から住民有志と一緒に講座を企画し12月26日(日)から3月27日(日)の間に6回(感染拡大によりリモート開催や日程変更あり)を開催しました。また、本事業は、町の重点施策でもある「次代を担う地域人材の育成」との関連性もあることから、総務課企画係と連携しました。

第1回 12月26日(日)

『諏訪式。』

”来たり人“の目を、心を開く

映画『ものがたりをめぐる物語』の撮影のため、諏訪取材し『諏訪式。』(亜紀書房)を出版された作家・プロデューサーの小倉美恵子さんが、「ふるさと難民」という言葉を投げかけました。

小倉さんは、地元神奈川県川



会場とオンラインによる参加で小倉美恵子さんの話を聞く

崎市で、ふるさととはどこか問われても明確に答えられない若者を知ったそうです。

それに対し、高度経済成長長期以降の消費社会とともに失われつつある縄文時代から脈々と受け継がれた”百姓“の暮らしや世界観、身体感覚が諏訪の風土のなかに今も宿ることを見て、諏訪人を「軸足のある人」と表現されました。

諏訪は、悠久の歴史のなかで内なる力(諏訪にあるもの)と外の力(諏訪にないもの)を合わせて異なる次元の地平を切り開き、融合の過程で諏訪にあるものの側に重心を置くことで主体性を保ってきたのではないか。

個々にばらばらに見えながら横のつながりを持ってきたのではないか。諏訪に生まれ育った人、諏訪から外に出た人、外から諏訪にやってきた人、それぞれが自分自身の座標軸(いつどこで生まれ育ったのかという時間と土地)を持ち寄り、諏訪という土地で出会うことで、これからも新しい物語が紡ぎだされるはずだ。風土との向き合い方を様々に教えてくれる諏訪は、ふるさと難民にとっても可能性に満ちた場といえるのではないだろうか。

質疑では、

ふるさと難民がふるさとを持つためには役割分担を持ち自分と相手の座標軸を出しあえる関係ができたらい、小さな粒々が地域に溶け込むためのつながりが地域のなかにできたらいい、まちづくりは身の丈で始めないと苦しくなる

などの話がありました。

第2回 1月16日(日)

あの時の下諏訪、あの時の私
デジタルアルバムで振り返る

下諏訪の古い写真をアーカイ

ブ化し、インターネット上で公開する作業をされた元下諏訪町立図書館長の井上喜久美さんは、100枚に及ぶ写真から昭和期を中心に町史、日本史、世界史と自分史を絡めながら町の変遷を辿られていました。

万治の石仏前の念仏講、戦時中の金属回収で台座に狛犬がない秋宮、出征兵を見送る下諏訪駅風景、衣類不足を補うために麻を栽培していた頃の明新館、御田劇場の青年演劇演者集合写真、映画館三国座、四ツ角の道路拡張工事風景、精密工場社内風景、埋立工事前の諏訪湖、平成の豪雨災害、野沢菜を樽に漬ける人々、各地区のお祭り、今は無き店舗の数々、蚕糸会社の繭倉

などの写真が映されました。



井上喜久美さんの解説と写真で下諏訪町の歩みを振り返る

その後、「来たりもの(移住者)」、「Uターン」、「地の人(地元の人)」と3グループに分かれ、下諏訪の好きな場所や魅力、好きな行事やイベント、残したものを話し合いました。

温泉、八島湿原、諏訪大社、慈雲寺、諏訪湖、公園、宿場町、諏訪湖越しの富士山、カフェ、空気がきれい、水がおいしい、人との距離感がちょうどいい、伝統を大事にしている、色々な生き方を試せる

などの意見が出され、ふるさと回帰の時間となりました。

第3回 2月6日(日)

あなたが下諏訪で暮らす理由を教えてください。これから下諏訪へ来る人のために。(オンライン)

有限会社クローバーデザイン
取締役で令和三年度の下諏訪町商工会議所青年部会長の宮本総子さんが経済的・経営的な観点から話をされました。

商工会議所の資料によると、県内中小企業の業績は前年対比で落ち込みが大きく、町の企業も同様に厳しい状況にあること

がわかる。また、外から稼ぐ強みの産業は、製造業と観光業(飲食・サービス業)だが、この30年で町の製造品出荷額は4分の1に減少し、大型店やホテルの閉鎖により消費が減少、約100億円が町外へ流出していることが読みとれる。現在の日本は、人口減少傾向で町も少子高齢化が進行している。

フォーキャスティング(現在の延長線上に想定される未来)でなくバックキャスティング(望ましい未来の姿)で考え、これからは、地域の望む未来に理念とビジョンをみんなで意識し、望む未来に向かって行動し、誰もが自己実現をめざしながら、公益資本主義で利益体質な地域を目指すことが大事。地域課題を協力して解決できることが、嬉しくて楽しいという風土が町にできると、求心力が生まれ交流のまちななるのではないか。

グループワークでは、①なぜ下諏訪にいるのか、②未来へ向かうために今の困る・気になることをシェア、③困ったこととお悩み解決アイデアを出し合いました。各グループから出された意見の一部をご紹介します。

コロナ禍もあるが、子どもが遊ぶ場所が少なく、今ある機能に遊び場をデザインすることが必要。多様な世代が自分事としてかわれることが大切。駅の活性化。働く場所が少ないのでベッタタウンを考える。自転車が安心して走れる道路があればいい。温泉も魅力で移住したので活かしたい。お店、特に書店が減り文化的刺激が少ない。団体・町内会に若い人が参加しにくい状況がある。空き家が多いので、若い人が安めのいい物件に入り、定住してくれるとよい。学校で学ばないことを事業にできないか。移住者がお店を開き、改めて魅力に気づかせてくれる。

宮本さんは、これらの課題を考え続けていくことが暮らしやすさに直結すると話されました。

第4回から第6回までは8月号で報告します。



オンラインで話をする
宮本総子さん

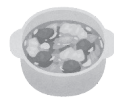
公民館講座参加者募集

申込先 ☎28-0002

ウクライナ料理を作ってみましょう

パンプーシュカ(ちぎりパン)、チキンキウ(キエフ)(バターのスティックを鶏肉でくるんで揚げたカツ)を作ります。ポルシチをお土産にご用意します。

※感染症対策のためお持ち帰りとなります。



- ◆日時 7/26(火)
①10:00~12:00 ②13:30~15:30
- ◆定員 各回8名 ※①②の内容は同じです。
- ◆講師 赤司 慶子
- ◆受講料 1,000円
- ◆申込開始 7/4(月)9:00~電話または窓口にて
※7/25(月)までにお支払いをお願いします。

ウクライナのひまわりをアクセサリーに ~陶芸体験~

本格陶芸と同じ技法で作るブローチ・ペンダント・アクセサリー・トレイ、世界にひとつの作品を作ります。

- ◆日時 8/5(金)、8/17(水)、8/28(日)
13:30~15:00(全3回)
- ◆定員 15名
- ◆講師 戸田 あつこ
- ◆受講料 1,500円
- ◆申込開始 7/4(月)9:00~電話または窓口にて
※8/4(木)までにお支払いをお願いします。



◎下諏訪図書館7月の休館日は、1・4・11・19・25日です。

下諏訪町暮らしの中で

くらしの道具店 Bappa 4・5

みやざわ
宮澤

まき
真希 (上馬場)

営業時間
10:00～17:00
定休日
火曜、日曜、不定休



移住する前、下諏訪町で独自の考えを持ち起業した人や芸術活動をされる人に会い、私たちもそうしてみたいと思っていました。路地にある暮らしが好きで、歩きや自転車で行動できる職住一体のコンパクトな暮らしを望んでいたの

で、飯田市から移住し、町内で住み替えながら、まち歩きで縁のあった方の空き家を借りられることになり、本当に感謝しています。ちょうど前回の御柱祭の時期に引っ越すことができ、雑貨店併設で建築設計事務所を開いてから6年ほど経ちました。

4・5畳の小さなお店で下諏訪



町内の木工品や戸隠の根曲竹細工、国内で作られた食器、荒物雑貨、家事道具などを扱っています。日々の暮らしにちよっとでも楽しさや喜びを感じられるものをお伝えできたらと思っています。

お店は、中高生の通学路に面しているため、子どもたちのにぎやかな声が聞こえる、人の息吹が日々感じられる地域にあります。

狭い路地の住宅地域なので、場所が分りにくく、迷われる方も多いのですが、多くの方が「下諏訪っていいところですね」「下諏訪町ってすてきなお店がたくさんあって、楽しいですね」と言ってくださり、私もとても嬉しくなります。

ちょうどよいサイズの町で、下諏訪町の方はやさしく、あたたかい方が多く、気さくに話しかけてくれる地元の方や、ゆっくりした町の雰囲気がとても暮らしやすいと感じています。

そうした町の良さを、下諏訪町を訪れる方も心地よく感じてくださっていて、また来たいと思って



いただけるのは、いろいろな魅力のある町だからなのだと思います。少しずつ人とのつながりも増え、日々安心して過ごせるのも、この地域に仲間入りさせていたただいたおかげであり、下諏訪町で暮らすことができているおかげなので、とてもありがたいと思っています。

これからも下諏訪町での暮らしを楽しみつつ、訪れる方に下諏訪町のよいところをたくさんお伝えしていけたらと思っています。

体力づくり教室

昨年度好評につき今年も開催！
バランスの取れた体に！

ピラティス

- 日時 7/16、23、30(土) 全3回
10:30~12:00
- 会場 下諏訪体育館アリーナ
- 講師 長矢 良子 (スポーツ推進委員)
- 対象 町内在住・在勤の小学4年生以上
- 定員 20名
- 受講料 100円



西洋のヨガといわれるピラティスは、体幹やインナーマッスルを鍛えてバランスの取れた体にするを目的としているため、高齢者や体に不調のある人でも無理なく取り組めるエクササイズです。

◆各教室の申し込み先 下諏訪体育館窓口または、☎27-1455

◆申し込み締め切り 7月9日(土)17:00

★当日は、運動のできる服装で、上履き、マスク、タオル、飲み物、ヨガマットをご持参ください。
(ヨガマットをお持ちでない方には貸し出します。)

★新型コロナウイルス感染拡大の状況により、内容の変更、または中止となる場合があります。

町民大学②

演題

「共生社会」っていいことあるの

～誰にとっても生きやすい社会へ～



講師：茅野 進 先生 (諏訪圏域発達障がいサポートマネージャー)

日時：7月24日(日) 午後1時30分～午後3時00分

会場：文化センター小ホール

※当日参加可 (受講料無料)

※新型コロナウイルス感染拡大の状況によっては、参加方法を変更する場合があります。

最近、テレビや新聞紙上で聞かれるようになった「SDGs」や「共生社会」、「発達障害」、はたまた「LGBT」。何か新しい世の中が始まる予感のする「共生社会」ってなんだろう？障がい者の人たちも大事だけど、自分にも関係あるの？もやもやするところを、新たな視点・フィロソフィー(英知)から見直すことを通して、「共生社会」を一緒に考えてみましょう。

■ 問い合わせ 下諏訪町公民館 ☎28-0002

七月のこえ

夏になると、自宅近くの浮島で水中眼鏡をかけ、水着姿で川に飛び込んで遊ぶ子どもたちを見かけます。自分が子どもの頃は家の近くの川で遊ぶことは日常的でしたが、近頃では珍しい光景なのかもしれません。

それにしても、普段、外で遊ぶ子どもたちの姿を見かけなくなっただなと感じていただけに、歓声をあげて遊ぶ子どもたちの姿は新鮮で「下諏訪っていいところだな」と思いました。

以前、片付けをしていて、昭和42年11月20日下諏訪小学校児童部発行「みずべ」を見つけました。「なんでこんな古いものが」と思ったら、そこには、小学5年生だった夫の作文が載っていました。

作文には、釣りが大すきで、三年生のころからヤマメを釣ってみたいと思っていて、5年生になった夏休み、ラジオ体操が終わった後に友だちと浮島に出かけ、ヤマメを釣りに行ったことが書いてありました。

「ググーと手ごたえが来た。…ぐいぐい引っ張っているうちにぶつんと切れてしまった。…ついにヤマメは取れなかった。くやしい、くやしいと思いつつながら帰ってきた。いつか、かならず釣ってやろうと思っている。」で、作文は終わっていましたが、ヤマメとの対決は当分続いたようです。

わたしも同じ頃、餌にするミミズを捕まえ、竹竿と一緒に持って、川エビを釣りに行ったことが、今でもよい思い出になっています。

いつの時代であっても子どもたちが夢中になって遊び込める場所が身近にあるというのは幸せなことだと思います。子どもの知的好奇心や感性を育む自然豊かな環境をこれからも大切にしていってほしいと思います。

(林 尚江)